

2015.11.29 待降節第1主日

目を覚まして祈りなさい

ルカによる福音書 21:25-28、34-36

(そのとき、イエスは弟子たちに言われた。)

「太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂うので、諸国の民は、なすすべを知らず、不安に陥る。人々は、この世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うだろう。天体が揺り動かされるからである。そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々を見る。このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の 때가近いからだ。

放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意しなさい。さもないと、その日が不意に罨のようにあなたがたを襲うことになる。その日は、地の表のあらゆる所に住む人々すべてに襲いかかるからである。しかし、あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。」

説教

自転車ロードレースにツール・ド・フランスがあります。三週間にわたるレースを前にプロローグが毎年趣向を凝らして行われます。オリンピックでもそうですが、大きなスポーツ大会はいきなり競技が始まるのではなく、序章にあたる儀式＝プロローグがおこなわれるのが恒例です。教会暦も主の降誕の前に待降節があってクリスマスを待ち望むプロローグがあります。(教会の歴史の方が古いのか、スポーツ大会の歴史の方が古いのか、どちらかの古いほうが本家なのかもしれませんが、古代ギリシアオリンピックの式次第が残っていればわかるかもしれません。)

待降節の第一主日では毎年「目を覚ませ」がテーマです。三年サイクルの聖書日課の各年にマタイ・マルコ・ルカの福音書からみことばを聞きます。こ

としはルカ福音書からみことばを聞いていきます。（きょうのテーマとは直接関係ないのですが、ヨハネ福音書には「目を覚ましておけ」というみことばがありません。なんでかなあ、いつかその意味に気づいたらお伝えしようとおもいます）

キリスト教の教義のうえでは、キリストの来臨はふたつあります。

1. 神のみ子が人となって地上に生まれた。
2. 終末に人の子は再びやってくる。

1つ目はイエスがヨセフとマリアの子として生まれたこと、イエスの誕生のことです。

2つ目は雲に乗って地上にやってくる救い主、キリストの終末における再臨「主は生きている人と死んだ人とを審くために来られます」と使徒信条でわたしたちが告白しているキリストの再臨です、第二の来臨という言い方もあります。

キリスト＝メシア＝救い主がやってくる、一回目はみ子イエスの誕生として、二回目は救い主キリストが人間を審き、そして人を救うためにやってきます。クリスマスを通してわたしたちはみ子の降誕を祝うのですが、もう一つの大事な意味合いとして終末における救いの実現、み子の再臨を想うという二重の祝いとして（一粒で二度おいしい？）イエスの誕生を祝います。そこで、待降節というプロローグをもうけ、またその初日に終末を改めて思い起こす聖書箇所を毎年読み続けているということになります。

さて、きょうのみことばではルカの福音に記された終末の世界の様子を読みました。つい先々週（2015.11.15）にマルコ福音で読んだ終末の有様のルカ・バージョンとなります。両者はよく似ているのですが細部では違っています。ルカでは終末には天体、地表で異変がおきる、そして天変地異が始まると人は気を失う、恐ろしくてひっくり返るということでしょうか。でもそんな時にイエスが再臨するのだから気を失っている場合でない、目を覚ましておけというような表現になっているかとおもいます。ところで、聖書に

書いてある事柄を、現実の出来事、歴史の出来事にあてはめて、聖書にはこう書いてある、何々の書の何章何節にあるのは、いま起きているこの出来事のことだという解説をするのはわたしは嫌いです。なんか偽預言者のやることのように思えるからです。

先々週のマルコ 13 章の解説では触れなかったのですがテーマとなってる聖句をとりあげるとすれば「わたしのことばは決して滅びない」です。

天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。 マルコ 13:31

この「決して」ということは絶対ということです。このイエスのことばをわたしなりにイメージするとそれは潜水艦の沈没です。

潜水艦はもともと沈んでいます。船なのに浮かぶ舟ではなく沈む船として作られ使われています。また、ほとんどが軍艦として使われているので戦闘で沈むこともあるわけです。もともと沈んでいる潜水艦が攻撃によって沈められる、なんか矛盾しているようですが、現実にはおこりうる出来事です。

天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない、とイエスはいいました。

沈められた潜水艦は何千メートルもの深い海の底にコツンと着艇します。その水圧に耐えながら、光の届かない真っ暗な深海で「決して滅びない」とその日（イエスの来臨）を待っている、そんな「潜水艦の沈没」のイメージで、この聖句を理解しています。

きょうのルカ福音の主題聖句はここになります。

人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。 ルカ 21:36b

ここではマルコでは触れていない、祈りに重点が置かれています。目を覚ましていることは祈ることだと解釈されています。その日（終末）は罨のようにあなたを襲う、でもあなたはそこから逃げて祈っていなさい、目を覚ましていなさい、と書いてあります。

ルカ福音書の読み方にはコツがあります。わたしはまだそのコツを飲み込んでいないので、どうもルカ福音書をそこに書いてある通り一遍の意味合いで理解する傾向があります。

つまり「人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい」という聖句を、いい子はできるでしょうよ、優等生のすすめですね、とひねって理解してしまうということです。というのも、けっこうルカの聖句をもちだして説教する人が多いからです。みことばの深い意味を表面的になぞって、それルカにはこう書いてある云々と説教が始まります。きょうのみことばを深い海の底に沈められて、それでも身をひそめている潜水艦に乗船している気分でわたしたちは味わい、聞きましょう。

日々の生活の不安と恐怖の中で震えているわたしたちが「わたしの言葉は決して滅びない」というイエスの約束を信じて「いつも目を覚まして祈」ることが出来ますように。
